

[教育実践報告]

作業療法士養成課程における園芸を用いた教育実践報告

爲 近 岳 夫 宮 田 浩 紀 山 野 克 明

A Report on Educational Practices Using Horticulture
in the Training Course for Occupational Therapists

Takeo TAMECHIKA, Hironori MIYATA, Katsuaki YAMANO

和文抄録

2018年、本学の新アリーナ横に園芸実習スペースが整備されたのを契機に、生活機能療法学専攻では著者の担当している一部科目（基礎作業学技法など）で園芸を講義に取り入れている。限られたコマ数の中で、栽培から収穫物の活用まで園芸のプロセスを体験させるため、初心者でも比較的栽培と管理が容易なサツマイモを栽培することとし、土を耕す工程から、苗植え・収穫・調理するまでの一連の作業を体験するように講義計画を設計している。

概ね受講生は園芸という作業を楽しみ、作業療法の基盤となる「作業」を学ぶ素地を体験的に得られていた。今後、受講生が卒後にさまざまな場面で園芸を用いた作業療法を展開していくためには、野菜や花などの栽培に関する基礎知識に加え、管理作業体験や対象者の身体状況に合わせて提供できるような作業環境の工夫も体験できるようなカリキュラムの検討が求められる。

キーワード：作業療法士，園芸，園芸療法，養成教育

I. はじめに

2018年、本学の新アリーナ横に園芸実習スペースであるコミュニティーガーデン・薬草園が整備された（図1）。コミュニティーガーデン・薬草園の整備は、本学が2012年度頃より教育環境充実のためにキャンパス拡張計画を推し進め、2016年度に土地を購入した¹⁾ことが始まりであった。取得した土地が農業振興地域内の農地であったため、本学と土地を管轄する熊本市との間で「農業に関する教育ができる環境を整備する」という取り決めが交わされた。その教育環境整備の主体を生活機能療法学専攻が担うことになり、具体的な協議が重ねられ、生活機能療法学専攻の学生に対して園芸療法に関する授業で



図1 コミュニティーガーデン・薬草園

所属

熊本保健科学大学 保健科学部 リハビリテーション学科生活機能療法学専攻
責任著者：tamechika@kumamoto-hsu.ac.jp

利用することとなった²⁾。園芸療法は、対象者の年齢や生活機能の状態に関係なく心身の双方に働きかけることのできる技法のひとつであり、学生の作業療法に対する動機づけにつながる教材として適切であると考えられ、1年次のカリキュラムへの配当が計画された。そして、著者の担当科目である「基礎作業学技法Ⅰ・Ⅱ」のシラバスに取り入れ、都合4コマの園芸に関連した講義・演習を実施している。

本学のような作業療法士養成課程を有する医療系大学の中には、全国大学実務教育協会が規定する園芸療法士認定カリキュラムを提供しているものは全国に3校³⁾あり、大学教育の付加価値的要素の高い科目と位置づけている教育機関もある⁴⁾。本学においても園芸療法を大学教育の特色とするべく、周辺に田園風景が広がる豊かな実習環境を活かした園芸療法教育の実現可能性を模索しているところである。園芸療法教育は、まだ統一されたテキストやカリキュラムがなく、各教育機関が独自に工夫しながら行われている状況⁵⁾であり、参考とすべき具体的な実践報告も少ない。今後の園芸療法教育の発展のためには、たとえ試行的なものであっても、実践報告を重ねることは意義のあるものとする。

本報告では、これまで本学で行ってきた園芸を取り入れた教育実践を振り返ることで、作業療法士養成課程における卒前教育に園芸を取り入れることの有益性や課題を明らかにするとともに、全国大学実務教育協会が規定する園芸療法士の資格制度を本学に整備するうえでの参考資料を得ることを目的とする。

Ⅱ-1. 作業療法における園芸

治療的な視点で園芸が利用されるようになったのは18世紀後半～20世紀とされ、精神障害や知的障害のある対象者が始まりとされる。アメリカでは大戦が契機となり1950年代には園芸療法の講義が始まり、オランダ、ベルギー、ドイツなどでは身体障害者用に配慮されたガーデニングが工夫され、各国に広がっている⁶⁾。

日本においても園芸は、精神障害領域でわが国の作業療法創世者である加藤普佐次郎が作業種目の一つとして用いたのをはじめ、精神科病院や結核療養所ではなじみのある種目⁶⁾である。5年ごとに日本作業療法士協会が作業療法のサービス提供状況をま

とめた「作業療法白書」をみても、精神障害作業療法の医療領域で約6割^{8, 9)}が園芸を使用しており、次いで老年期作業療法の医療や介護領域で約2割程度の使用という状況^{8, 9)}であった。このように精神障害作業療法の分野で比較的良好に用いられていた園芸であるが、2005年度の白書⁹⁾になると、それまで見られなかった身体障害作業療法の医療領域で10.6%の利用がデータに現れる。

現時点で最新のものとなる2015年度の白書¹⁰⁾によれば、身体障害作業療法の医療領域で5.5%、精神障害作業療法の医療領域で19.8%、発達障害作業療法の医療領域で0.8%、老年期障害作業療法の介護保険領域で9.2%の施設で園芸が利用されており、全体的に減少傾向にあるものの、さまざまな分野・領域で実践されていることが分かる。

近年の園芸に関する作業療法の実践報告を概観すると、介護老人保健施設などの老年期作業療法の介護領域での報告¹¹⁻¹⁵⁾や身体障害作業療法の医療領域の報告¹⁶⁻¹⁹⁾が多くみられるようになっているが、精神障害作業療法の報告^{20, 21)}は少ない。対象疾患・障害で見ると、認知症^{11, 12, 14, 15, 20)}や脳血管障害¹⁶⁻¹⁹⁾、大腿骨骨折後遺症¹⁷⁾や統合失調症²¹⁾の報告がある。患者の生活歴や作業歴に着目しながら作業を提供する作業療法にとって、園芸は適応疾患・障害が広い作業であり、今後も実践の広がりが期待される。

Ⅱ-2. 基礎作業学技法とは

本学の2019年度入学生までのカリキュラムでは、1年前期と後期にそれぞれ「基礎作業学技法Ⅰ」「基礎作業学技法Ⅱ」として開講されている。いずれも選択の専門科目である。演習を主体とした科目で、作業療法士国家試験の出題傾向も考慮しながら、臨床実習や卒後の臨床場面で用いられる代表的ないくつかの作業を体験し、作業遂行に必要な材料や道具、工程に関する知識を習得することを目標としている。体験する作業種目としては、革細工、エコクラフト、木工、陶芸、調理などを行っていたが、2018年度からは前述の通り園芸実習スペースの整備されたことから、園芸を加えている。

Ⅲ. 実践内容

1. 対象

本学の作業療法士養成課程1年生である。園芸がシラバスに設定されている基礎作業学技法Ⅰ・Ⅱの講義に2018年度は48名、2019年度は39名が受講し、受講率は100%であった。倫理的配慮として、講義後に受講生の反応を確認する目的で園芸に対する感想を自由記載でレポート提出を求めたが、成績評価に一切影響しないことを受講生に口頭で説明し同意を得た。レポートは2コマ終わるごとの提出とし、記名を妨げなかったが、無記名・無回答も保障した。レポート回収後は、感想を転記し個人が特定できないように加工した。なお、自由記載のレポートの回収率は100%であった。

2. 講義の構成

植物を栽培し活用する知識と技術を学ぶことと、時間経過を伴って求められる作業が変化する特徴がある「園芸」の一連のプロセスを体験することを意図して講義の設計を試みた。限られたコマ数の中で、栽培から収穫物の活用まで園芸のプロセスを体験させるため、初心者でも比較的栽培と管理が容易なサツマイモを栽培することとし、土を耕す工程から始めて苗を植え、成長を見守り、収穫して、調理するまでの一連の作業を体験することとした。講義で受講生が体験した作業工程を表1に示す。講義の中に組み込めなかった水やりや草取りも、園芸では重要な作業であるが、他の作業に比べて受講生に作業経験があることを鑑みて、コマ数の都合上、経験の乏しい作業を優先させることとした。

表1 受講生が体験した作業工程

1.栽培方法について学ぶ	
2.鋤を使って土を耕す	
3.畝を立てる	前期 (2コマ)
4.マルチングフィルムを張る	
5.サツマイモの苗を植える	
6.水やり、除草作業をする	未経験
7.サツマイモを収穫する	
8.収穫したサツマイモを陰干しする	後期 (2コマ)
9.片手で調理する工夫を考える	
10.片手で調理する	

1) 基礎作業学技法Ⅰ（前期）

まずは、園芸の心身に及ぼす影響と作業をする上でのリスク管理について講義を行った。そして、実際に栽培するサツマイモの栽培方法についての知識について講義を行った。座学形式で知識を学んだ後、「鋤を使って土を耕す」、「畝を立てる」、「マルチングフィルムを張る」、「サツマイモの苗を植える」といった作業を実際に行った。それぞれの工程に必要な道具の名称や使用方法についても体験しながら事前に座学で学んだ知識と結び付けていった。

2) 基礎作業学技法Ⅱ（後期）

「サツマイモを収穫する」、「収穫したサツマイモを陰干しする」作業を体験し、次週で収穫したサツマイモを調理することとした。サツマイモを使った熊本県の郷土料理である「いきなり団子」を片手で作る（片麻痺患者を想定）こととし、片手で作るにはどのような援助（道具ややり方の工夫）が考えられるか調理の実習を実施するまでの課題とした。「いきなり団子」を課題とした理由は、筆者が臨床場面で用いた経験が多くあり、作業工程が豊富で失敗が少なく、患者への適用の幅が広いためであった。使用手は、受講生が1年生ということもあり、難易度を考慮して利き手とした。調理場面では、実際に受講生が考えた方法で行い、実施してみてもうまいかなければどうすればうまくいくのか改善方法についても受講生同士で検討することとした。

3. 観察された受講生の反応とレポート内容

1) サツマイモの苗植え

前期の5月上旬に、サツマイモの苗を植える作業を行った。サツマイモを植える作業の実施時期が1年生前期の最初の時期ということもあり、初めは受講生同士の交流にぎこちなさが見られたが、数の限られた鋤などの道具を分け合い、マルチングフィルムを張る作業などの体験を複数の受講生同士が協力して行う中で、徐々に打ち解けていく様子が観察された。また、偶然通りがかった近隣の小学生と受講生とが交流する姿も見られた。

レポートの内容は「幼稚園の時以来だったので、とても楽しみにしていた。また、小学校を卒業してから土に触るという機会があまりなく、土に触れたのも久々だった」、「畑自体はじめてだったので、難

しそうだと思っていたけど意外と簡単で楽しかった」と多くの受講生が初めての体験であったり、プランクがあるなど園芸の経験に乏しいことが伺えた。

それゆえに「土のおいも良かった」、「土に触れて心が落ち着いた。とても不思議に思った」と土に対する感覚の好意的な感想も残っていた。そして、「屋外で作業するので、息抜きや気晴らしになると思った」、「外での活動なのでリフレッシュできた」、「満足感や達成感を得ることができた」と作業を楽しみ、効用について体感している様子も窺えた。

多くの受講生が「患者さんで行う場合でも、一緒にコミュニケーションを取りながら楽しくできると思った」、「あまり話したことがない人と話すことができたり、一緒に作業ができるから楽しかった」、「作業しながら会話が長く、作業の話から個人的な話まで色んな会話ができて、笑い合ったりと楽しい時間を過ごすことができ、これが園芸の良さではないかと感じた」、「園芸は一人でやっても楽しいだろうけど、友達と一緒にやることでより仲が深まったし、協力することの大切さを学ぶことができた」というように他の受講生との交流を深めたことを記述していた。

また、「みんなと楽しみながら気づかないうちに運動できて良いと思った」、「足腰が強くないといけなかったり、誰かと協力しないといけないと感じた」、「思ったより体全体を動かし、腕や手以外にも膝を使うことが分かった」、「普段運動を全くしないので、結構疲れを感じた」と身体的負荷に対する感想も多くみられた。それゆえに「端の方は少し土が固くなっていて掘りにくくなっていたので、病院でリハビリテーションとして用いる場合は、あらかじめ土を柔らかくしておいたり、大きめのスコップを用意しておくの良い思った。注意点・考慮すべき点を考えながら授業へ参加したい」、「思っていたよりも力がある作業は、手が不自由な方には持ちやすい工夫を考えるなど、何か対策を考えないといけないと思った」と身体障害をもつ患者者に対してはどのように対応するかに思考が及んでいる記述も散見された。

中には「同世代の友達だけでなく、様々な世代の方と交流することを目的として、今回のような園芸をやってみても面白そうだなと思った」といった園芸の発展的な利用に関する記述もあった。

2) サツマイモの収穫 (図2)

後期の10月初旬に、サツマイモの収穫作業を行った。苗植えを行った前期と比べると受講生同士仲の良い友達もできているようで、小集団に分かれていた。また、カエルや虫を嫌がって少し離れたところから見ている受講生と、声をあげて土を触る受講生に分かれるなど序盤は対照的な様子もあったが、芋掘り作業を進めるにつれ、予想以上の収穫量に驚きの声が上がリ、小集団を超えて受講生同士の交流が盛んになっていった。作業中の筆者と受講生との会話の中で、多くの受講生がサツマイモを好んで食べることも分かった。

レポート内容からは、苗植え作業同様に経験に乏しい記述が多くあり、「人生で初めてでとても楽しかった」、「とても楽しかった。人生で2回目だけど」と受講生の気分が高揚した様子が伺えた。そして、「普段あまりしゃべらない人とも楽しくていつの間にか笑顔になっていた」、「普段なかなか話さきっかけのない友達とも芋掘りを通じて話すことができて楽しかった」、「前回よりも友達と楽しく作業できた」といったように受講生同士の交流についての好意的な記述も多くみられた。

そして、「収穫作業は意外ときつくて汗もたくさんかいたけど、その分たくさん芋が収穫できた」、「想像していたより重労働できつかったが、達成感が大きく、作業を通じて清々しい気持ちになった」と予想以上に身体的負荷が高かったとの記述も多くある一方で、「精神疾患の患者さんのリハビリテーションとして行われている理由がはじめて理解できた」、「身体機能回復も期待できるが、心の状態も良くなると思う」と精神面への効果も体感されていた。

一方、「虫やカエルが多く住んでいて何回も驚か



図2 サツマイモ収穫の様子

された」,「私のような虫が苦手な患者さんにはどうするのだろうか」と園芸には付きものの虫等に関するネガティブな記述や,「10月でも汗をかくので,水分補給を忘れないように注意が必要」,「足場も不安定なので,引っ張るときに後ろに転んでけがをしないように注意」とリスク管理に関する記述もあった。

また,「時々成長を見ていたが,育てることをしていない」,「自分たちは植えた後の世話をあまりしなかったが,もっと世話をすることで達成感も生まれると思う」,「成長していく過程を観察するのも心には何らかの影響があるのではないか」といったように,管理作業体験の必要性を示唆するような記述があった。

3) サツマイモの調理 (図3, 4, 5)

後期の10月中旬に調理をおこなった。片麻痺患者の調理場面を想定し,事前に片手で調理する工夫を受講生が考えて実践した。図3は受講生のアイデアの一例であるが,サツマイモを切ったり,皮をむく作業中にサツマイモが動かないように太い輪ゴムでまな板に固定している。それでもサツマイモの固定がうまくいかず悪戦苦闘していた。受講生は,片手で調理することの難しさを体験し,患者理解と環境・代償アプローチについて学習を深めた。



図3 サツマイモを片手で調理する工夫

作業療法の臨床場面では,2~3本釘を打ちつけたまな板を用意し,それに切る対象物(いもなど)を刺して固定するのが一般的である。初めから教示するのではなく,まずは受講生の自由な発想と不自由さの体験を重視している。



図4 片手で団子の皮を伸ばす作業



図5 いきなり団子を蒸している様子

電子レンジの利用など簡単にする方法もあるが,おいしさの演出と,できるだけ受講生が多様な経験を積むことも重視し,講義ではあえて蒸し器を使う体験をさせている。

IV. 考察

1. 園芸を講義に取り入れることの有益性

受講生の多くが園芸の作業経験に乏しいことから,卒後に園芸を治療に用いるために卒前に体験する機会を持つことは意義があるものと考えられる。患者のニーズに合わせて作業を提供する職種である作業療法士は,自身も様々な作業を体験し知識を持ち合わせておく必要がある。

また,人や動物と違い,植物との出会いは人に緊張を与えることが少ない²²⁾。園芸は植物という共通の対象が介在し,屋外という開放感のある場での活動ということもあって受講生の緊張は緩和される。園芸を用いた作業療法の実践報告の中でも,失語症患者に奏功した例^{16, 19)}もあり,積極的に言葉を介さずとも取り組みやすい園芸は,作業を通じて人とのコミュニケーションをとる機会になると考える。こ

のようにリラックスした状況下で園芸という身体活動を伴う体験を共有することで受講生同士の交流が促進されており、大学生生活に慣れていない時期にこそ有益だと考える。よって、1年生の前期の講義の初期に園芸を設定することで、いわばアイスブレイクとして用いることができると提案したい。

そして、園芸という共通の体験は、「作業」の特性について学ぶのに有用と考える。今回、受講生のレポートを改めて見直すと、受講生の記述は「作業」の本質を捉えていると感じられるものが多く見受けられた。まだ専門用語を学んでいない段階であっても、体験的に「作業」について学んでいると感じられた。後に「基礎作業学」などの科目で作業療法の基盤となる「作業」に関する知識を学習するうえで、教員と受講生らが共有している園芸体験があるということは、知識を結び付けて理解することを促進できる可能性があると考えられる。

2. 今後の課題と展望

現状では限られたコマ数の中で園芸を行っていたので、水やりや除草作業などの管理の体験を受講生はしていなかった。しかし、受講生のレポートの記述から管理作業体験の必要性を示唆するものもあり、将来的には管理作業も含むカリキュラムとしたいと考える。

また、全般的に園芸の作業について好意的ではあったものの、予想以上に身体的負荷が高かったと記述している受講生もいる。畑を使ったサツマイモ栽培だけの体験であったので、身体的負荷の低い栽培方法についての体験が現状ではできていない。卒業後、園芸を治療場面で活用できる作業療法士を養成するためには、様々な患者の身体状況に合わせて園芸の内容を変化させるバリエーションについて学習する必要があると考える。たとえば、比較的容易に栽培ができる鉢植えやプランター栽培や、車椅子に座ったまま作業がしやすいレイズドベッド、コンテナ、ハンギングバスケット⁶⁾などである。

本学のコミュニティーガーデン・薬草園は地面で作業する設備しかなく、段差もあり、車椅子利用者などの身体に障害がある利用者には使いやすい状態ではない。裏を返せば今後受講生の手によってバリアフリー化や改良についての検討ができる場合があるともいえる。疾患特性や分野によっても使い分けができるようなカリキュラムを考えたい。また、作業療

法士が臨床場面で園芸を活用していくために、例えばサツマイモを栽培して調理をするといったように、植物を栽培するといった園芸本来の活動だけでなく、収穫したものを利用するといった周辺活動の教育の充実を図りたいと考える。

それから、偶然通りがかった小学生との交流もあったが、受講生からも世代間交流のアイデアが示されており、地域と大学との交流を目的とした文字通りコミュニティーガーデンとしての活用も検討したい。例えば、気軽に地域の高齢者が立ち寄れる場としたり、受講生と小学生とで植物を栽培し加工までを体験したり、受講生主体で園芸を活用した高齢者の介護予防プログラムの企画運営などの取り組みである。

V. 結語

本報告では、これまでの本学作業療法養成課程における園芸を取り入れた教育実践を振り返った。受講生の園芸経験は乏しいものの、講義に取り入れることで体験の機会を持つことができ、概ね受講生は園芸という作業を楽しみ、作業療法の基盤となる「作業」を学ぶ素地を体験的に得られていると思われる。

卒業後に受講生がさまざまな場面で園芸を用いた作業療法を展開していくためには、野菜や花などの栽培に関する基礎知識の習得に加え、管理作業体験や対象者の身体状況に合わせて提供できるような作業環境の工夫も体験できるようなカリキュラムを検討したい。

なお、本研究における利益相反は存在しない。

文献

- 1) 熊本保健科学大学：自己点検・評価報告書 平成29（2017）年度版. pp.68-69, 2018.
- 2) 熊本保健科学大学60周年記念誌編集委員会編：学校法人銀杏学園熊本保健科学大学創立60周年記念誌10年のあゆみ. pp.86, 2019.
- 3) 一般社団法人全国実務教育協会：園芸療法士.
<https://www.jaucb.gr.jp/zaigakusei/license/horticultural-therapy.html> [2020年9月23日アクセス]
- 4) 佐竹勝, 中裕俊介, 嶋野広一, 他：園芸療法科

- 目履修生による園芸活動の現状－卒業生へのアンケート調査から－. 大阪河崎リハビリテーション大学紀要8 (2) : 134-139, 2014.
- 5) 珠数美穂, 佐竹勝, 珠数孝, 他: リハビリテーション専門職を目指す学生への園芸療法教育の実践. 大阪河崎リハビリテーション大学紀要4: 75-82, 2010.
 - 6) 山根寛: 園芸 (日本作業療法士協会編), 作業－その治療的応用第2版. 協同医書出版社, 121-129, 2008.
 - 7) 山根寛: 植物を用いる療法のあゆみ (山根寛編), ひとと植物・環境－療法として園芸を使う－. 青海社, pp.18-25, 2009.
 - 8) 日本作業療法士協会: 作業療法白書2000. 2001.
 - 9) 日本作業療法士協会: 作業療法白書2005. 2006.
 - 10) 日本作業療法士協会: 作業療法白書2015. 2017.
 - 11) 野口順平: 認知症を呈した症例にプール活動レベルを用いた園芸活動の支援. 山口作業療法11 (1) : 75-78, 2018.
 - 12) 土居香, 萬屋京典, 八木田眞光: 寝たきり超高齢者の園芸－介護療養型医療施設で得た役割－. 山口作業療法9 (1) : 15-17, 2016.
 - 13) 牛若さおり: 楽しめる場所が私の居場所－作業をすることで元気になれる申し送り表を使用した連携－. 福井県作業療法士会学術誌2 (1) : 8-9, 2015.
 - 14) 大井裕貴: 重度認知症患者デイケアの役割. 長野県作業療法士会学術誌29 : 22-23, 2011.
 - 15) 押川武志, 小浦誠吾, 萩原永士, 他: 認知症者に対する園芸療法が対人関係の広がり発展した1症例－特別養護老人ホームでのかかわりを通して－. 認知症ケア事例ジャーナル1 (1) : 61-68, 2008.
 - 16) 立川真也, 古松山建吾: 失語症のクライアントの Well-Being の向上を目指した実践－APO 等化尺度を用いて－. 関中央病院年報19 : 39-41, 2018.
 - 17) 土岐紗緒里, 神田太一, 山内春香, 他: 回復期リハビリテーションにおける園芸活動が与える影響－自発性の向上がみられた一症例の経験から－. 八千代病院紀要37 : 30-32, 2017.
 - 18) 鈴木陽子: 生活行為向上マネジメント－対象者と家族を共に支援し, 畑での野菜収穫動作を再獲得した事例－. 山形県作業療法士会誌13 (1) : 29-32, 2015.
 - 19) 館山美奈子, 佐藤優実, 福土春香, 他: 家庭生活への不安を持つ右片麻痺患者への園芸活動効果. 青森県作業療法研究11 (1) : 37-38, 2002.
 - 20) 鈴木粧子: 自己有用感の獲得が精神機能面の賦活に繋がり傾眠の減少やコミュニケーションの増加に結び付いた症例について. 山形県作業療法士会誌9 (1) : 23-27, 2011.
 - 21) 佐藤嘉孝: ある長期精神科入院者への退院－ベットサイドの関わりから園芸, そして退院に至るまで－. 沖縄県作業療法研究3 : 13-14, 2009.
 - 22) 山根寛: 療法としての園芸の効用 (山根寛編), ひとと植物・環境－療法として園芸を使う－. 青海社, pp.75-87, 2009.

(令和2年12月2日受理)

A Report on Educational Practices Using Horticulture in the Training Course for Occupational Therapists

Takeo TAMECHIKA, Hironori MIYATA, Katsuaki YAMANO

A horticultural practice space was developed next to the university's new arena in 2018. Using this opportunity, the Division of Occupational Therapy at the university has incorporated horticulture into our courses (e.g., Basic Theory of Occupation). The goal of the lecture was to provide students with experience in a wide range of activities, from the cultivation of plants to the utilization of the harvest, in a limited number of lectures. We decided to cultivate sweet potatoes, which are relatively easy to grow and manage even for beginners. The lecture plan was designed to give students a series of hands-on experiences from tilling the soil, to planting, harvesting, and cooking. The participants generally enjoyed the horticultural activities and gained groundwork for learning "occupation" as a basis for occupational therapy. In order for students to develop their occupational therapy using horticulture in various settings after graduation, it is necessary to devise a curriculum that allows students to obtain basic knowledge about growing vegetables and flowers as well as the experience of cultivation management and the creation of a work environment that can be adapted to the physical conditions of the subjects.

Keywords : Occupational therapist, Horticulture, Horticultural therapy, training and education